

老人の余暇と余暇歴について

萩原清子

はじめに

最近、余暇問題が種々な領域で議論されている。特に、産業構造審議会余暇部会が今後の「余暇の動向と余暇行政のあり方」を答申し、あわせて「60年のわが国余暇の長期展望」をまとめたことにより、余暇は今日では、ナショナルな政策レベルの問題となってきた。ところでこの答申によると、わが国余暇の現代的課題は、労働時間の短縮、休日の増加による自由時間の確実な拡大に伴う問題、加えて、高度成長により達成された物的繁栄の中での精神不安、勤労意欲の喪失といった諸問題に解答を与える対応策を用意することとなっている。このような視点から余暇が位置づけられるのであれば、老人の場合には、この答申の余暇問題とは若干視点を違えて接近しなければならないであろう。なぜなら、老人という社会的地位は、労働時間の短縮によって自由時間の増大を獲得する集団でもなく、さらに、労働との対比で“生きがい”を問題にしたり、労働内容を充実させることにより勤労意欲の“回復”を社会的に期待する世代でもないからである。では、老人にとって余暇は問題とならないのであろうか。

本稿では、以上のような余暇一般についての現状を踏まえたうえで、老人と余暇の関係をとりあげようとするものである。すなわち、老人にとっての余暇の特殊性を明らかにすることがここでの課題となる。換言すると、心身機能の低下、労働からの隠退とそれに伴う所得および社会的役割の喪失、子供、配偶者等家族からの別離に直面せざるをえない老人にとって、余暇はどのように捉え、位置づけられるであろうか。以下、若干の資料を基に余暇一般の分類と、老人に関する余暇の分類を整理し、次に、老人の余暇活動について実態調査の結果を分析し、最後に、老人と余暇をつなぐつなぎ方、すなわち、老人にとって余暇をどのように考え、発展させていったらよいか、について課題提出を行なうことにする¹⁾。

I 老人の余暇とその現状

1. 余暇活動一般の種類と分類

現代社会は「余暇の時代」といわれている。しかしそれは、むしろ現代社会を特徴づけている「技術の時代」「速度の時代」「家事合理化の時代」「事務管理の時代」²⁾のもたらした1つの結果であるともいわれる。したがって余暇とはきわめて歴史的・社会的概念といえることができる。だが、今日、余暇といわれるものの範囲や意味内容は多種多様であり、とりあげ方も各人各様となっている。たとえば余暇の機能を問題にするかと思えば余暇時間の使い方を問題にしたり、あるいは活動内容から分類する場合もみられる。また、余暇と日本語で表現される言葉自体の中に、leisuretime, sparetime, hobby, recreation等の活動内容が混在したまま使用されている。なお、ここにいる余暇とは、おおむね労働および家事労働の重荷から解放された“余裕のある時間”と規定しておこう³⁾。この余暇時間に対する対し方が、既存の資料では種々な接近形態をとってあらわれている。

(1) 機能的分類と余暇の定義

「余暇文明の中心的課題は、自由時間の使い方において、積極的な態度を養成することにある」と規定したJ. デュマズィエは、余暇を機能的に、①休息、②気ばらし、③自己開発、に3分類した。J. デュマズィエによると、休息の機能とは、人間を疲労から回復させることであり、気ばらしは人間を退屈から救出するという。そして最後に自己開発機能の説明として、遊戯団体、文化団体、社会団体に自発的に加入して活動するところに余暇の開発的機能があらわれる、としている。以上余暇について3機能を区別した後、次のように余暇を規定する。すなわち、「余暇とは、個人が職場や家庭、社会から課せられた義務から解放されたときに、休息のため、気ばらしのため、あるいは利得とは無関係な知識や能力の養成、自発的な社会的参加、自由な創造力の発揮のために、まっ

1) なお、この研究は、青井和夫先生を主査とする厚生科学研究費による「社会福祉と余暇に関する研究」の一部をなすものである。

2) 大道安次郎『老人社会学の展開』ミネルヴァ書房、昭41 p. 212—213.

3) 大道安次郎、前掲書、p. 212.

たく随意に行う活動の総体である⁴⁾と。

(2) 余暇活動の内容からみた分類

現実の余暇活動を基に、①休息、②マス・コミ、③交際（個人的・社会的）、④趣味・教養、⑤興行・娯楽、⑥勝負・賭事、⑦移動（旅行など）、⑧するスポーツ、の8つに分類したのは中島巖である。氏は以上の8つのカテゴリーをさら4つに再分類している。(i) 受動的余暇（テレビ、ラジオ、新聞、出版物、休息等）、(ii) 交際、(iii) 文化的余暇（趣味、けいこ事、技能・資格のための勉強、子どもの遊び等）、(iv) レジャー（これは狭義のレジャーを指し、日本語で普通レジャーといわれている部類の余暇。具体的には見物、鑑賞、各種ゲーム、ギャンブル、行楽、散歩等が入る⁵⁾）。

(3) レクリエーション状況からの分類

レクリエーションを、その形態と種類から分類すると、①ひとり、②家族づれ、③仲間づれ、④団体に分けられ、種類としては ①ドライブ、②ハイキング、③釣り、④見学・見物、⑤ギャンブル、⑥スポーツ、⑦その他に分類する仕方もある⁶⁾。

(4) 余暇行動の諸形態（婦人の場合）

婦人の場合についてとくに次の分類が試みられている。①休養化、②家事労働の追加、③育児の追加、④収入労働化（労働への追加行動）、⑤教養・娯楽行動（文化的行動）——(a) 教養を志向する諸行動（読書、社会教育への参加）、(b) 娯楽（テレビ、スポーツ、旅行など）への「みる」又は「する」形での参加、——⑥交際、⑦ショッピング、⑧社会活動化——(a) 専門職的行動（報酬を伴い本来職業）、(b) 一般の団体的・グループ的行動（共通利益をもつ集団——たとえばPTA、婦人会、読書会等）、(c) 各種の奉仕活動（サービスに対しての報酬は本来期待できない）。これら8つの分類のうち、⑤～⑦の行動は、所得水準の高い層、家事専業の婦人層、中年婦人層に多くみられるようである⁷⁾。

(5) 余暇活動の種類による分類

余暇開発センターが昭和47年度調査に用いた分類基準は、実際活動の種類を網羅的に集め、それを12に分類している。そこでは、①創作活動（小説、詩、俳句、曲、絵、工芸）、②けいこ事（茶、花、おどり、料理、

琴、ギター、詩吟）、③学習活動（読書、研究、英会話、講演など）、④観賞（映画、芝居、音楽会、美術展）、⑤ゲーム（パチンコ、マージャン、スマートボール）、⑥ギャンブル（競輪、競馬、ボートレース）、⑦旅行（花見、観光、慰安、温泉、海外）、⑧個人競技スポーツ（ゴルフ、テニス、ボーリング）、⑨チーム競技スポーツ（サッカー、バレー、バスケット）、⑩山岳性スポーツ（登山、キャンプ、スキー）、⑪海洋性スポーツ（ヨット、スキングダイビング、水上スキー）、⑫空域性スポーツ（グライダー、スカイダイビング）となっている⁸⁾。

以上、余暇一般について、主に活動の側面から分類されたものを掲げたが、一見してわかるように、老人の余暇活動はかなり限定されるし、機能も異なることが予想される。そこで、次に老人の余暇に関する資料を整理することにする。

2. 老人に関する余暇の種類と分類

一般的に、老人の余暇は、退職後の拡大した自由時間に関連して論じられる場合が多い。そこでは、一般社会からの排除感、孤立状態、社会的地位および役割の喪失を克服する目的で余暇が問題とされている。したがって、家族、コミュニティ、レクリエーション施設、交遊関係、諸団体の役割が余暇ないし余暇時間の問題として議論される傾向にある⁹⁾。老人の余暇は、これらの背景を担って具体的な分類がなされているのである。その意味で、余暇一般の分類基準とは異ったものとなっている。

(1) 社会参加の役割に従ったホビーの分類

これは、いくつかのホビーについて、社会参加の役割を基準に分類したものである。①創造性（彫刻、園芸、かご細工、ひざかけづくり等）、②知識および技能(skill)の習得（コレクション、読書、音楽、動・植物の研究）、③競技とゲーム（チェス、ビンゴ、クロケット等）、④非競技的スポーツとゲーム（手品、釣り）、⑤見物活動（コンサート、映画、演劇、運動競技、テレビ）、⑥考えや意見の交換を含んだ社会性の獲得。これらは老人のホビーを、参加の役割によって分類したとされている¹⁰⁾。

(2) 老人向社会的プログラムを行動のタイプから分類

これは、老人の余暇に対して、老人センターの提供す

4) J. Dumazedier 中島巖訳『余暇文明へ向かって』東京創元社、昭和47、p. 17—19.

5) 中島巖訳、前掲書付、「訳者補論——日本の余暇」p.319—324.

6) 関谷耕一、関谷嵐子『余暇と労働時間』日本労働協会、昭和45.

7) 関谷耕一、関谷嵐子、前掲書。

8) 財団法人余暇開発センター『日本人の余暇行動調査』昭和48.3.

9) たとえば、“Handbook of Social Gerontology” XII The Uses of Leisure by Max Kaplan, “the aged, the family, & the Community” 7. Impact of extended leisure time by Minner Field.

10) J. Kaplan “A Social Program For Older People” 1953, p. 88—89.

るプログラムに沿って分類したものである。したがって、老人センターの活動内容を、活動の種類毎にカテゴライズしたといえる。①食事サービス（コーヒー、昼食、夕食等）、②安安静なゲーム（カード、ダイス、パズル、クロケット等）、③行動的なゲーム（バレーボール、バドミントン、ゴルフ、ボーリング等）、④誕生会の開催、⑤遠足・見学、⑥屋内の余興（Home talent）、⑦屋外の演芸・余興、⑧一般教養的プログラム（栄養、住宅、家族関係、近隣活動等）、⑨病人又は家に閉じこもりがちな老人に対する訪問、⑩芸術及び技能、⑪コミュニティ・サービス（博愛事業のための基金集め、民間防犯活動、青年団への援助等）¹¹⁾。

(3) オランダにおける老人の余暇

これは若干古い調査データの引用になるが（1958年、12,000人対象）、オランダにおける老人の余暇のすごし方をみてみよう。合計比率を100とし、割合の高い順に記すと、①庭いじり、農場手伝い等25%、②趣味、編物等24%、③トランプ、チェス、パズル解き、音楽等18%、④散歩、魚釣りを含むスポーツ16%、⑤読書8%、⑥動物の飼育6%、⑦その他3%となり¹²⁾、農業国オランダの特徴を示すと同時に、老人の余暇のすごし方について、一般的ともいえる傾向を示している。

以上は外国の資料を基に老人の余暇活動をみたが、日本における老人の余暇の現状はどのようなものであろうか。

(4) 老人の生活時間（平日）

NHKの「国民生活時間調査」（昭和45年）によると、60歳以上男子の生活時間は、すい眠（8～9時間）、仕事（6時間強）を除くと、テレビが3～4時間で第1位を占めている。この傾向は女子についてもいえるが、女子の場合には、男子の「仕事」が「家事」に代ったにすぎない。したがって、余暇のすごし方は、ほとんど屋内の活動に限られ、しかもテレビをみている状態にある。

(5) 老人の趣味・娯楽

総理府「老後の生活に関する世論調査」（昭和44年）によると、趣味ありと答えたものが男59%、女36%にすぎず、有趣味の答えのうち、男の第1位は「盆栽・花・植木いじり」25%、ついで「旅行」12.4%、第3位「囲碁」8.3%となっている。女子の場合にも第1位は「盆栽・花・植木いじり」11.5%、2位「旅行」9%であ

るが、3位は「いけ花」5.2%となっている¹⁴⁾。いずれにせよ趣味の範囲は狭く、活発に趣味活動を行なっているとはいえない。

(6) 無職老人の余暇のすごし方

前記総理府調査によって、無職の老人の余暇のすごし方をみると、男子の第1位は「なんとなくぶらぶらしている」53.9%が半数をこえているのに驚く。ついで「趣味」18.7%、「孫の世話」15.1%となり、女子では「家事」58.6%が第1位を占めているものの、第2位は男子同様「なんとなくぶらぶらしている」30.8%、ついで「孫の世話」23.7%となっている¹⁵⁾。以上のことは、自由時間の増大と、「なんとなくぶらぶらしてすごす」状態との関係をどのように解釈するかという問題を提出している。

(7) マス・コミと趣味

46年度東京都老人福祉調査では、余暇活動をマス・コミと趣味に2分類している。マス・コミ関係はテレビとラジオ、新聞に分類されている。他方、趣味活動は「草花の手入れや庭いじり」が第1位を占め、ついで「旅行」「芝居・映画・寄席」が続いている。一般的に旅行は老人の楽しみと考えられているが、6カ月のうちに、日帰り旅行、一泊旅行を問わず、両者ともに7～8割の老人がわずか1～2回の旅行をしたにすぎない。したがって、1年に2～3回の小旅行が老人にとって趣味となり、楽しみとなっていることがわかる¹⁶⁾。

(8) 余暇時間とその利用

余暇（自由）時間の量とその利用状況について調査した結果によると、平日では有職男子の自由時間は3～5時間未満の割合が最も高く、女子では9時間以上の率が多数を占めている。無職者になると男子の8割以上が1日平均9時間以上の自由時間をもっている。しかし女子では、無職の場合でも9時間以上は4割にすぎない。自由時間の増大を老人世代の特徴と位置づけながら、時間量そのものは職業の有無、性別によりかなりの差のあることがわかる。しかし、一般的には、相当量の自由時間を有しているといわれる老人も、その利用状況をみると、男女ともに「テレビ、ラジオ、新聞、雑誌」に費すものが半数以上を占め、ついで「休養・散歩」にあてる人が多い。自由時間の利用状況について性別の特徴をみると、概して男子は屋外型の活動をし、女子は屋内型の行動を示している。しかし余暇時間の使い方をみると、「ひとりぐらし」の老人はその他の家族構成をもっている老人

11) J. Kaplan, 前掲書, p. 93—94.

12) "Social Welfare of the Aging"—Patterns of Leisure-Time Behavior of the Aged in Netherlands—, p. 139—147.

13) NHK「国民生活時間調査」（昭和45年）。

14) 総理府「老後の生活に関する世論調査」（昭和44年）。

15) 総理府, 前掲書。

16) 東京都「東京都老人福祉基礎調査報告書」（昭和46年）。

より、男女ともに無趣味「別に何もしていない」とする人の割合が極めて高くなっている。つまりひとりぐらし世帯および老人世帯ほど、余暇時間の利用態度は全般的に消極的といえよう¹⁷⁾。

3. 老人階級の余暇の定義——「新しい余暇階級」

以上のように、余暇活動の種類ないし余暇時間のすぐし方から老人の余暇を規定するのではなく、社会的義務としての労働との関係で老人の余暇を捉える捉え方がある。大道安次郎氏は、社会的階層を年齢という角度から捉え、老人集団を「新しい余暇階級」として概念化したのである¹⁸⁾。この概念は、社会的義務としての強制労働から解放された、余暇の自由を楽しめる時期をいいてたもので、ブルジョワジイなどの上流階級を捉えた「余暇階級」(T. H. Veblen)とは異ったものとして位置づけている。また大道氏は、「余暇」概念に2つの異った意味を発見し、一方を老人の余暇、他方を「余暇時代」の到来といった場合の余暇に区別している。すなわち、現代社会は「余暇の時代」であるという場合の「余暇」概念は、「労働」と結びつけて捉えられている。それは「労働」が中心であり、余暇は労働に従属し、いわば労働のための余暇である。労働は強制観を伴い、疲労や苦痛がつきまとうものであるから、この強制感、疲労、苦痛などから解放されること、この解放によってエネルギーを補充して再び労働に従事しようとするための「余暇」であると規定する。

他方、老人の余暇、ここでは「新しい余暇階級」という場合の「余暇」概念は「労働」とは切離して捉えられ、労働とは直接結びついていない。なぜなら、老人の時期は、責任のある第一線を退いた時期であり、それは一応強制的な労働から解放されているからである、という。したがって「新しい余暇階級」の「余暇」は文字通り余暇であって、仕事のための余暇ではなく、「余暇のための余暇」だと規定される。

以上、老人の余暇について、一般的余暇との対比の中でその現状と概念が明らかにされた。これら既存の資料による整理から、老人の余暇を特徴づけるなら、概念的・理論的には社会的責任から解放された年齢階層の「余暇のための余暇」をどのように使うかという問題であり、余暇の実際には、テレビ、旅行、庭いじり、園芸

に代表される活動が主流を占め、余暇プログラムをみるかぎりでは、老人集団を対象にした余暇活動がセットされていた。しかしこれらを一言でいうなら、多くの老人は余暇時間を消極的、受動的に費やしていたといえることができる。

したがって、以下では、「余暇のための余暇」が何故に消極的、受動的にしか利用されていないのか、といった点の解明を含めて、老人の余暇の実態を実態調査の結果に基づいて分析しよう。

II 老齡期の余暇と余暇歴¹⁹⁾の実態²⁰⁾

老人の余暇の現状は、受動的余暇を主流に、活動内容は一日の多数を無為ないしテレビですごし、年に2～3度の旅行を最も楽しい趣味と考え、残りは屋内で家事、孫の世話、植木いじり、碁・将棋をしてすごしていると描くことができよう。そこで、今日における老人の余暇が、なぜ受動的・消極的余暇を結果しているのかを明らかにするために、実態調査を行なった。この受動的余暇の状態は、一般的には心身機能の低下、所得の減退、社会的・家族的役割の喪失から説明することもできよう。

19) ここにいう「余暇歴」とは、過去の余暇経験を「独身時代」(20歳未満)、「新婚時代」(20～30歳)、「子育て時代」(30～40歳)、「子の独立時代」(40～59歳)、「現在期」(老齡期)(60～69歳)の5つのライフ・ステージに大別し、各々の時代に行われた余暇活動を「余暇歴」と呼称した。調査は、第2次調査にくみ入れ、質問紙面接調査方法をとった。「余暇歴」の解答は、フリー・アンサーとしたが、各ライフ・ステージ別に、あらかじめ5種類(おけいこ事群、旅行群、趣味群、団体・組織活動群、みろおよびするスポーツ群)の余暇活動を大別し、各群に若干のサンプルを示した記入欄を設け、過去の各時代ごとに「楽しかったこと」「長く続けた趣味」「コッタ活動」等があったかどうかをたずねた。

20) 本章に用いている資料は、財団法人「余暇開発センター」との共同研究の際に得た調査結果に加筆したものである。研究メンバーは、筆者のほか松山美保子(余暇開発センター主任研究員)、高橋敏士(社会保障研究所研究員)、直井道子(東京都老人総合研究所社会学部研究員)、野島正也(余暇開発センター研究員)などの諸氏であるが、本章では筆者が担当した領域にとくに限定して執筆していることをお断りする。なお、老人の余暇活動全般にわたっての調査結果は「老人のための余暇ファシリティの調査・研究」(余暇開発センター、49年3月)に報告されているので参照されたい。

本章に紹介した実態調査は、老人の余暇活動の現状把握を主な目的として、昭和48年11月、都内23区内に居住する60～69歳の男女について、住民台帳より無作為に抽出し、第1次調査と第2次調査(追跡調査)の2段階に分けて実施された。第2次調査は、第1次調査の回収サンプル(サンプル数610、男313、女297)を活発グループ、一般グループに分類し、各々150サンプルを抽出して行なった(回収サンプル数213、男105、女108)。

17) 老人問題研究会「老人の社会活動に関する研究」東京都民生局委託研究、昭和48年。

18) 大道安次郎、前掲書、p.206—237。

しかしここでは、老人自身の余暇歴との関係で、現在の余暇状況を明らかにする方法を採用する。すなわち、老齡期の受動的余暇状況は、老人自身の過去の余暇歴にかなり影響されているはずである、との仮説にたって、実態調査を基に検証することを目的とした。もし老人の余暇が、過去の余暇歴に影響されているとするなら、老齡期における自由時間の増大を安易にとりあげ、老人イコール余暇世代とか、余暇消費世代として位置づけ、今日の一般的風潮である“余暇・レジャーブーム”の中で扱うことは問題の的を見失うことになろう。この点をふまえて、以下、過去と現在期（老齡期）の余暇活動の特徴を量的に把握し、ついで、老齡期の受動的余暇の発生過程について、フリーアンサーから得たデータを基に、質的な側面から説明することにする。

1. 過去と現在における余暇活動の特徴

(1) ライフ・ステージ別男女別余暇活動の特徴

過去および現在の活動は性別によって異ったパターンを提示しているかどうかをみることにする。ここでは、活動「なし」と「その他」の活動といった分類困難な解答を除いて、活動数の高いものから上位3位を取りあげた。表1によると、「老齡期」は男女ともにみるスポーツと一泊旅行が上位2位を占めている。しかし順序は全く逆で、男の1位は「みるスポーツ」であるのに、女の1位は「一泊旅行」となっている。したがって老齡期の余暇活動として最もポピュラーな「旅行」は、実は女性型余暇といえそうである。では、過去の活動はどうかという、男の20代、30代には「するスポーツ」が、

「旅行」、「仕事」より上位にある。しかし、これらの活動も40代50代になると、「するスポーツ」は「みるスポーツ」へ変化し、代りに「仕事」がやりがいのある活動として上ってくる。また、一般的に老人の余暇活動として常に登場する碁・将棋は、40代にすでに趣味活動の地位を確保している。他方、女子の華道、茶道、三味線、和洋裁等のおけいこ事は、嫁入り前に身につけておかねばならない教養であったことがわかる。それは「独身時代」の女子の1位から3位までがこれらのおけいこ事で占められていることからもういふことができる。したがって、女子の過去の活動をみると、これら花嫁修業の活動は、その本来の性質から何らかの形で日常生活に残留・定着し、この日常性とは異った活動は、ヒマとお金とチャンスに恵まれた場合に登場することができる。その典型的なものが一泊旅行として実現し、脱日常的活動を代表することになる。

(2) 老齡期における余暇活動の特徴

ここではとくに、余暇歴のうちの「老齡期」の活動について若干の特徴をみることにする。

① 現在の職業の有無別老齡期余暇活動の特徴

余暇活動は、有職か無職かによって大きく規定されるであろう。そこで、職業の有無別によって老齡期の余暇活動がどのような特徴を示すかみてみよう。表2にみられるように、勤め人の場合には「みるスポーツ」が他の活動を大きく引離し、ヒマ（時間）の無さを表わしていると解釈できる。つまり老人といえども、被用者は余暇活動といえるほどのことをしていない。ただし活動内容は多様化している。

表1 ライフ・ステージ別男女別活動順位（上位3位）(注)

活動順位	ライフ・ステージ 性別	独身時代 (20歳未満)	新婚時代 (20～30歳)	子育て時代 (30～40歳)	子の独立した時代 (40～59歳)	現在 (60～69歳)
第1位	男	するスポーツ	一泊旅行	(一泊旅行 仕事)	みるスポーツ	みるスポーツ
	女	(華道・茶道・書道 和洋裁)	一泊旅行	和洋裁	和洋裁	一泊旅行
第2位	男	一泊旅行	するスポーツ	(一泊旅行 仕事)	一泊旅行	一泊旅行
	女	(華道・茶道・書道 和洋裁)	和洋裁	一泊旅行	一泊旅行	みるスポーツ
第3位	男	みるスポーツ	仕事	碁・将棋	碁・将棋	園芸
	女	(三味線、ピアノ、 一泊旅行)	華道・茶道・書道	(華道・茶道・書道 みるスポーツ 園芸 三味線・ピアノ)	(華道・茶道・書道 歌・うたい・浪曲)	(和洋裁 華道・茶道・書道)

(注) 各ライフ・ステージにおける活動「なし」および「その他」の活動は除いた順序。括弧印は同率を示す。

表2 有職、無職別「老齡期」の余暇活動（上位5位）(注)

順位		1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
被 用 者	活 動	みるスポーツ	マージャン	一泊旅行	テレビをみる	和歌・俳句・映画・パチンコ・ゴルフ
	%	26.4	ともに 7.5			ともに 5.7
自 営 業 (含家族従事者)	活 動	一泊旅行	みるスポーツ	園 芸	和 洋 裁	碁・パチンコ・仕事
	%	38.3	25.9	12.3	9.9	ともに 8.6
無 職 (男)	活 動	一泊旅行	みるスポーツ	園 芸	魚 釣 り	町内会活動・宗教活動
	%	40.0	33.3	26.7	20.0	ともに13.3
無 職 (女)	活 動	一泊旅行	みるスポーツ	歌・うたい・浪曲	華道・茶道・書道	温泉に行く
	%	29.7	14.1	ともに 12.5		9.4

(注) 多答式のため比率の合計は100%をこえる。

自営業の場合では、勤め人と若干内容を異にするが、やはり仕事からの解放、息抜きとしての一泊旅行、みるスポーツ、が多数みられる。この場合にも時間的制約の中で、仕事との関係で最も有効な活動が選択されていると思われる。また5位に「仕事」があげられているが、自営業の性質から考えると当然の結果とみることができると。

以上は何らかの形で自由時間に制限のあるグループであったが、無職の場合にはどのような活動となるであろうか。表2にみられるように、上位2位は無職の男女ともに自営業のパターンをとっている。このようにみえてみると、一泊旅行、みるスポーツ(ほとんどテレビによる)といった老人の余暇活動は、職業の有無よりむしろ、自由時間が自分の意思によって自由に利用できるかどうかの度合に関係していることがわかる。したがって、老人の中でも、被用者としての勤め人が、自由時間に対する自由裁量を最も欠いているといえそうである。この自由時間に対する自由裁量の問題が、老齡期の余暇活動にかなりの程度影響していることになる。それゆえ、被用者としての勤め人が、最も余暇活動に対して消極的な結果を示したこともうなづける。

② 各ライフ・ステージにおける leisure poor の特徴

ここで leisure poor と規定したのは、各ライフ・ステージにおいて、どのような種類の余暇活動も解答していない場合(いわゆる無回答)をさしている。余暇歴に関す

表3 各ライフ・ステージ別活動「なし」の割合

(%)

ライフ・ステージ		独身時代 (20歳未満)	新婚時代 (20～30歳)	子育て時代 (30～40歳)	子の独立時代 (40～59歳)	現在 (60～69歳)
性 別	男	36.2	49.5	47.6	25.7	6.7
	女	45.4	70.4	66.7	47.2	22.2
計		40.8	60.1	57.3	36.6	14.6
現職の有無	被用者					15.1
	自営業					7.4
	無職(男)					6.7
	無職(女)					25.0

る活動内容は、コッタ活動、楽しんで続けた活動といった条件を付しているが、内容は相当の熟練、技能を要するものから、テレビを通じて「みるスポーツ」およびパチンコ、競馬、犬猫を飼うまで多岐にわたっている。このように、上述の条件を付しながらもかなり自由に、かつ広範に解答幅を設けているのに、各ライフ・ステージにおいて全くの活動「なし」が発見されている。そこで、この「なし」解答についてみることにする。表3によると、「独身時代」には4～5割のものが何も活動らしいものをしていないことになる。とくに「独身時代」の女性の場合、他の独身グループに比して「なし」の割合は高くなっている。「新婚時代」に入ると、女性の活動「なし」率はますます高くなり、70%のものが余暇活動を行

なっていない。すなわち、「独身時代」の活動はそのまま「新婚時代」に移行するのではなく、余暇活動においては「独身時代」から「新婚時代」にかけて、一種の断層、不連続状態を生起している。調査に用いている「新婚時代」とは、20歳代の約10年をとっているため、結婚による生活環境の変化および第1子の誕生ないし第2子の誕生がこの時期に含まれてこよう。したがって、次の「子育て時代」と合わせて、この両時代はライフ・ステージ中、最も余暇活動の貧しい時代といえる。そしてこの特徴は何よりも女性の場合に著しい。つまり、この両時代における女性の余暇活動の貧困化は、いかに家事・育児が女性の行動を規制しているか、ということを物語っている。このような考えは、「子の独立時代」になると、女性の活動「なし」がほぼ「独身時代」の割合に戻ることからもいうことができる。そして生涯のうち、「現在期」(老齢期)が男女ともに何らかの活動を行なっているものの割合が最も高いことは注目に値する。なぜなら、老齢期の余暇は、受動的・消極的活動を主流としていたにも係わらず、現在の老人にとって「現在期」は過去のいかなる時期より(単純に解答の有無を基準にすれば)余暇を活発に利用しているといえるからである。

以上、過去と現在における余暇活動の特徴について、主に、活動そのものを量的に扱ってきた。次に、この「余暇歴」をいわば質的側面から接近して、老人の余暇活動の特徴を明らかにしてみたい。

2. 余暇歴と老齢期の受動的余暇との関係

(1) 現在期(老齢期)余暇活動の類型化

① 継続・再開型(過去経験型)にみられる4つのタイプ

老齢期の余暇活動は、過去の経験に関連した活動と、老人になって初めて開始した活動とに大別することができる。ここではまず前者の場合から考えていくことにする。

過去に経験した活動の例とは、「現在期」(老齢期)の余暇活動が過去のいずれかの時期に行なった活動に規定されている場合である。これは、過去のいずれかの時期に経験し、それが現在期まで「継続」している活動と、過去のいずれかの時期に経験しながら一時期中断し、「現在期」になって再び開始した「再開」活動とに分類することができる。これら「継続」と「再開」の場合を合わせて、ここでは「継続・再開型」と呼び、さらに、「過去経験型」とも呼称することにする。この「継続・再開」型(過去経験型)を、仮にA型とすると、A型は

さらに4つのケースに分類することができる。

A-1タイプ:「独身期」経験型

A-2タイプ:「新婚期」経験型

A-3タイプ:「子育て期」経験型

A-4タイプ:「子の独立期」経験型

これら4つのタイプは、「継続」ないし「再開」の姿をもって「現在期」(老齢期)に顕在化することになる。

② 新規開始型(過去未経験型)にみられる2つのタイプ

①のA型余暇とは異り、「現在期」の活動が過去のいずれの時期にも経験していない場合(ここでは質問項目に無解答を与えた場合をさす)が考えられる。これは「老齢期」に新たに開始した活動であり、「新規開始」型と呼ぶことにする。この「新規開始」型は「過去未経験」型ともいうことができ、B型と称することにする。このB型は、A型同様さらに2つのタイプに再分類できる。つまり、

B-1タイプ:老齢期新規開始型

B-2タイプ:過去不連続新規開始型

の2つである。このうちB-1タイプは、過去のライフ・ステージにおいて、いかなる余暇活動も解答していない状態にあり、「現在期」(老齢期)になってからはじめて何らかの活動を開始した場合に相当する。すなわち全くの「新規」ということができる。B-1タイプに対してB-2タイプは、過去のライフ・ステージにおいて何らかの活動を経験していながら、「現在期」の活動はそれら過去の活動と何ら同一の活動を行なっていないグループがこれにあたる。つまり、過去の経験を生かしていなかったり、あるいは過去の活動とは不連続の状態、現在期(老齢期)の余暇活動を行なっている場合がB-2タイプということになる。

以上、2つの型、6つのタイプが、余暇歴と老齢期の余暇活動を考察する上で、理論的に考えられるパターンである。それでは以下、これら理論上の分類にしたがって、老齢期余暇活動の実態をみることにする。

(2) 余暇類型による「現在期」(老齢期)活動の実態

さて、「現在期」の活動は過去の活動とどのような関係にあるのであろうか。表4をみると、「独身期」に経験した活動(A-1型)は男女ともに「現在期」の活動に最も影響していることがわかる。つまり、「独身時代」に行なった余暇活動と同じ活動を、老齢期になっても行う傾向が高いことを示している。では、「新婚期」(A-2型)に開始した活動はどうかというと、それは老齢期に最も影響していない活動といえる。次に「子育て期」

表4 余暇分類別活動者数(注)

(単位:人)

		タ	イ	プ	男	女
A型余暇活動	A-1	(独身期に経験した活動が現在に影響)			24	25
	A-2	(新婚期 ")			2	4
	A-3	(子育て期 ")			9	5
	A-4	(子の独立期 ")			15	20
B型余暇活動	B-1	(過去に余暇活動経験なく、老齢期に新規開始)			7	17
	B-2	(過去に何らかの余暇活動を経験したが、老齢期に影響していない)			11	7

(注) 本表では「老齢期」の活動を浮彫りするため、過去と現在の両時期において、「みるスポーツ」(ほとんどテレビによっている)、パチンコ、マージャン、仕事、孫が楽しみ、といった解答は除いた。また、「老齢期」の余暇活動は「なし」と解答したものも除いた。

(A-3型)をみると、男子は女子に比べて「子育て期」の活動が「老齢期」により多く影響している。この男女差の説明としては、「新婚期」および「子育て期」における女性の日常生活上の制約(主に育児と家事)が、余暇活動として老後の活動に影響するほど深い行動として定着させなかったのではないと思われる。このような解釈を裏づけるものとして、「子の独立期」(A-4型)の活動をみてみよう。このA-4型は男性より女性に多くみられる。すなわち、女性の場合には、育児、家事からの解放が、余暇活動開始のモメントと考えられるところから、「子の独立期」に開始した活動はそのまま老齢期に持ち越されることが予想される。したがって、男子の場合には「子育て期」、「子の独立期」といった時期においても、ある程度マイ・ペースで余暇活動を行うことができるが、他方女子の場合には、何よりも出産、育児からの全面的解放、さらにある程度の家事からの解放がなされてはじめて老齢期に受け継ぐことのできる余暇活動が開始されることになる。

次に、B型をみてみよう。過去のライフ・ステージにおいて、何らの活動も解答していなくて、「現在期」(老齢期)になって初めて何らかの活動を開始したB-1型は、男子に比べて女子が2倍以上の数を占めている。この点は、「子の独立期」においてもなお家事、その他諸々の生活上の制約から女性が解放されていないことをあらわしている。したがって、老齢期に入ってやっと何らかの「余暇活動」を初めて行うようになったものは、男子より女子に多いということになる。つまり、家事、育児、経済からある程度解放されたと思ったら「老人」になっていた、ということであり、老人になってやっと自分の身体を自分の意思で自由にできるチャンスを得たものは、相対的に男子より女子に多かったといえる。

では、過去のライフ・ステージに何らかの活動を行っていたが、現在期は全く別の活動を行なっているB-

2型の場合はどうであろうか。これは、女性に比べて男性の方が過去の余暇活動を上手に生かしているということになる。

以上、A型余暇とB型余暇に2大別し、過去の余暇歴と現在の余暇活動との関連をみてきたが、その結果、「老齢期」における余暇活動は、過去の経験ないし活動開始時期によって、かなりの程度影響されていることが判明した。

次に、ライフ・ステージと余暇活動との関係を見ることにする。まず、パチンコ、マージャン、競馬、テレビによるスポーツ視聴等を除いた余暇活動を、性別に分類してみた(表5)。なお、ここで「趣味的活動」と「おけいこ事的活動」の相異について若干の説明をしなければならない。まず、ここにいる「趣味的活動」とは、行為の結果にあらわれる成功・不成功より、むしろ、行為のプロセスを楽しむところに第1の特徴がある。そして第2には、客観的技能の習得より、行為者の主観的満足をおこさせる活動であるということである。他方、「おけいこ事的活動」は、ここでは、行為のプロセスより、むしろ、結果の出来・不出来が評価される活動といえる。したがって、一定の客観的技能の習得を必要とし、しかもこの技能は授受可能なものである。それは、師匠と弟子、先生と生徒といった一定の人間関係、すなわち、教え手と習い手の中で獲得され、そこにはある種の *hardship* (厳しさ) が要求される。なお、女子の「おけいこ事的活動」の中に、和洋裁、華道、茶道を入れたのは、現在60歳をすぎている老齢婦人の多くは、これらの活動を結婚前の花嫁修業として、お師匠さんのところへおけいこに通わせられたと考えたからである。つまり、老齢期になって和洋裁を「趣味」だと認識していたとしても、これらの技術の習得にあたっては先生一生徒の人間関係を経た後の状態をさしているため、ここでは、和洋裁等の余暇活動を「おけいこ事的活動」に含めた。

ところで、上記の活動内容から意識的に排除した「み

表 5 性別、余暇歴別活動内容の分類

		A 型				B 型		合計 (人)	活 動 内 容
		A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2		
男	旅行活動	13	1	0	2	2	6	24	旅行
	趣味的活動	24	0	7	14	3	20	68	碁、将棋、園芸、つり、カメラ、絵画、ペットを飼う、雑誌編集、観劇、俳句、短歌、読書、ゴルフをする、ボーリングをする、楽器演奏、法律・語学等の勉強、歌、発明考案、音楽をきく、模型いじり、民具の収集、たいこ、鉄砲、酒、体操
	けいこ事的活動	1	0	0	1	0	0	2	書道、小唄、長唄
	その他の活動	5	2	4	6	1	5	23	講演旅行、町会役員、宗教、団体活動、仕事
女	旅行活動	6	2	1	8	9	13	39	旅行
	趣味的活動	8	1	1	7	6	9	32	園芸、観劇、民謡、絵画、ペットを飼う、俳句、短歌、読書、登山、たべ歩き、指圧
	けいこ事的活動	19	2	4	6	5	7	43	和洋裁、編物、刺しゅう、華道、茶道、書道、三味線、詩吟、日本舞踊、小唄、長唄、新内
	その他の活動	1	0	1	4	2	2	10	宗教、団体活動

るスポーツ」(その多くはテレビ)、それにマージャン、パチンコ、競馬についてふれなければならない。「みるスポーツ」に関していうなら、これはその多くをテレビに依存しているため「現在期」の活動として解答した対象者が最も多い(男 28 人、女 16 人)。テレビについては、その普及率との関係で独身期より中・高年期の余暇としてあらわれるのは当然である。では、マージャン等の活動はどうであろうか。マージャンは「独身時代」に開始した人が若干多く、パチンコの場合には「子の独立期」および「老齢期」に新規に開始した人が多くみられる。また、競馬になると、パチンコと同じく 50 代、60 代に余暇活動として開始した者の数が多数みられる。これらマージャン、パチンコ、競馬をここでは「娯楽的活動」と分類する。それは、息抜き、気ばらしといった機能を強く担った活動と考えられるからである。

以上、余暇歴と余暇活動の内容との関係を要約すると、「独身期」に経験した活動が「老齢期」にあらわれている活動は、男の場合、「趣味的活動」、女では「おけいこ事的活動」といえる。また、「子の独立期」の活動としては、男「趣味的活動」、女「旅行活動」といえる。B 型の老齢期新規活動をみると、男では同じく「趣味的活動」、女では「旅行活動」をあげることができる。さらに男子の場合、中・高年期余暇活動として、パチンコ、競馬等の「娯楽的活動」をおとすわけにはいかない。要するに、老齢期の余暇活動は、性別によって活動内容を異にすると同時に、各ライフ・ステージにおいても各々の時代に合った活動が経験されていたことが判る。

さて、以上の結果をふまえて、時代と性別(男女別)との側面から「老齢期」に何らかの余暇活動を行なっている者の類型化を行なってみよう。まず第 1 の基準である余暇歴(時代と活動)との関係で、A 型人間、B 型人間をみると、A 型(過去経験型)は、自発的、能動的余暇活動派ということが出来る。次に、B 型(過去未経験型)であるが、これは他動的、受動的余暇活動派と特徴づけることができよう。さらに、これらの A 型、B 型に属する男女の特徴をあげると、A 型の男子は「趣味人間」、A 型の女子は「おけいこ事人間」となる。B 型では、男子は「娯楽人間」、女子は「旅行人間」と規定できよう。いまこれを簡単に図式化すると以下のようにあらわすことができる。

老齢期における余暇人間のパターン

A 型 …… 自発的・能動的余暇活動派(継続・再開型)

A 型の男子 — 趣味人間
A 型の女子 — おけいこ事人間

B 型 …… 他動的・受動的余暇活動派(新規開始型)

B 型の男子 — 娯楽人間
B 型の女子 — 旅行人間

ここで、各々の余暇パターンを代表すると思われる事例を紹介しよう。この事例は、余暇歴について自由解答(フリー・アンサー)されたものを、調査用紙からピッ

ク・アップしてまとめたものである。

① 男子A型（継続・再開型、趣味型）

○ 妻と2人ぐらしの67歳の男子。開業医として第一線で活躍。平日の自由時間は4～5時間で、新聞、テレビ、読書に費している。余暇歴は「独身時代」に旅行、民具収集を趣味とし、その他ギター、マンドリン、チェロを弾いた。これらの多彩な活動は過去から現在まで一貫して継続されている。将来希望する余暇活動としては、楽器演奏の継続と、新規に和歌、俳句等があがっている。日常生活における生きがいは、患者に接して医療を行なっているとき、と答えている。

② 男子B型（新規開始型、娯楽型）

○ 技能労働者として勤務する62歳の男子。家族は妻と2人ぐらし。1日3～4時間ある自由時間は、新聞、テレビをみて過ごす。過去に余暇経験はなく、「老齢期」になって初めてパチンコと競馬があげられている。過去にしておきたかった活動も、また将来希望する活動も全くない。“毎日がせわしい連続だから”，生きがいとか生活のハリなど感じていない，という。

○ 現在、事務職として働く64歳の男子。家族は妻と子どもたちの4人ぐらし，1日4～5時間ある自由時間は，主に新聞，テレビをみたり，なんとなくすごしている。余暇歴をみると，「独身時代」にキャッチボール，「新婚時代」に旅行をした以外活動歴はなく，「老齢期」は専らテレビを余暇活動としている。本ケースの場合，「子育て時期」の欄に戦争が記されている。将来希望する余暇活動は，“働くだけで精一杯”なため別にない，という。生きがいは「息子の結婚」であり，健康で働ける現在が幸福な時期と考えている。

③ 女子A型（継続・再開型，おけいこ事型）

○ 64歳の女子。夫と死別してひとりぐらし。現在，洋裁とお花を人に教えている。主な生活源は恩給と年金。余暇歴をみると，「独身時代」に開始した華道，裁縫，旅行，登山といった活動は，全てのライフ・ステージを通じて継続され，さらに「新婚期」に始めたダンス，スキーが「子の独立期」まで継続されてきた。ただし，裁縫，華道は「新婚期」「子育て期」に中断し，「子の独立期」から再開。生きがい，生活のハリは，洋裁，お花の先生として生徒に教えていることに見出している。

④ 女子B型（新規開始型，旅行型）

○ 夫と死別した62歳の女子。現在，筋肉労働者として自活しながら未婚の子女と2人ぐらし。平日，2～3時間ある自由時間は，新聞，テレビをみて過ごす。過去に余暇経験はなく，「老齢期」になって旅行を開始した

のみとなっている。この旅行は，将来も継続させたい活動となっている。生きがいは「子どもと孫」。

⑤ 女子C型（余暇経験なしの典型）

このC型余暇は，調査票の余暇歴欄が白紙の例である。したがって，上述の余暇歴分類には含まれなかったケースである。

○ 夫と長男夫婦，それに末子の5人でくらしている69歳の女子。商売は酒屋で，本人も支店の酒屋を切りもりしている。自由時間がほとんどとれないせいか，余暇活動は全く貧困な状態にある。余暇歴をみると，「独身時代」には“親を早く亡くしたので思い出に残っている楽しみはない”とあり，「新婚時代」から「老齢期」にいたっては，“ずっと商売をしていて，忙しく趣味などない”という。生きがいは“末子に嫁をさがすこと”であり，幸福な時期は“長男夫婦，末子と一緒にくらしているし，それにお店をやっていることも楽しいから”「現在」であるという。

○ 68歳の女子。夫と子ども夫婦，それに孫の5人ぐらし。家は商売をしている。余暇歴をみると，“結婚してすぐ8人の子どもを次々に生んだので，何もできなかった”という。したがって，生きがいは“孫の面倒をみる”こと”であり，8人の子どもが成長し，孫の守りをしながら気楽に生活している「現在」が幸福な時期と考えている。

これまでわれわれは実態調査に基づいて，余暇歴と老齢期の受動的余暇との関係をいくつもの側面からみてきた。その結果，老齢期の余暇は，過去の活動開始時期および活動内容，さらに生活状態によって大きく影響されることがわかった。すなわち，「独身期」ないし「子の独立期」に活動を開始した場合には，「老齢期」の活動を規定しやすいといえる。さらに，過去において男子の場合「趣味活動」を，女子では「おけいこ事活動」を経験した時，「老齢期」の活動に影響を与えやすい。しかし，「老齢期」の活動内容が「娯乐的余暇」（男子）の場合，また女子では「一泊旅行，民謡・踊りの余暇」である時，過去の活動経験は直接影響するとはいえない。すなわち，「老齢期」になって初めて余暇活動を開始する人は，相対的に過去の余暇活動は *leisure poor* であり，同時に，「老齢期」の活動は，受動的・時間消費的活動を行う傾向にある。したがって，「老齢期」の受動的余暇はどのように形成されたか，という設問に対しては，第1に，過去の余暇経験として，充実した余暇活動をもっていた老人が相対的に少なかったといえる。そのため，

「老齡期」になって新規に開始される活動は、一泊旅行であったり、ギャンブル的な娯楽活動に陥りやすく、日常的活動としては「テレビ」視聴となる。これらの状況は、現在の老人の場合、戦争を経験し、経済的にも余裕のもてる生活は不可能な時代を生きてきたことに由来している。また、多子による出産、育児、家事によって人生の大半を自分以外の生活に捧げなければならない社会的背景から生み出されたものといえる。もし、「老齡期」の余暇活動が過去の余暇経験と相関しているのなら、現在の老人の受動的余暇傾向は、歴史的、社会的産物といえることができる。確かに、過去に活発かつ充実した余暇を送ってきたものは、「老齡期」に入っても、年齢に応じた余暇活動を活発に行なっている。このことは調査によって明らかにされたところである。要するに「老齡期」に余暇を活発に行なっている老人は、過去においても、ある程度質の高い余暇活動を経験していたことになるのである。

III 老人と余暇——むすびにかえて

以上、既存の資料および実態調査の結果をもとに、老人の余暇の特徴を明らかにしてきた。それは、一言でいうなら現実の余暇行動はあまりに *leisure poor* な状態にある。しかし、老人とは「新しい余暇階級」であり、社会的義務としての労働から解放された自由な時間を楽しむのために使える年齢集団であったはずである。ところがみてきたように、自由時間の増大だけでは、余暇活動を充実させることはできなかった。すなわち、余暇活動とは、急激な環境変化（自由時間の増大）に適応させられるものではなく、過去の余暇経験に左右されやすいものだということであった。

では、余暇活動を阻害していると考えられる要因は何であろうか。

1. 余暇活動を阻害している要因

(1) 過去において余暇活動を阻害している要因

- 男性の場合——戦争、仕事、経済的余裕のなさ
- 女性の場合——出産・育児、家事、経済的余裕のなさ

(2) 老齡期の余暇活動を阻害している要因

(i) 個人的側面

- ① 老後における余暇設計の不備
- ② 過去の余暇歴（経験）との関係
- ③ 有職による自由時間の欠如
- ④ 小遣い額の僅少さ

(ii) 環境的側面

- ① 地域に余暇ファシリティが少ない（あっても利用に際し高額ないし若年層向）
- ② 体系的老人向余暇対策の不備

2. 「余暇利用権」の確立をめざして

「余暇」とは、本来、国家の介入を期待すべき領域の問題ではなからう。事実、前述の産業構造審議会余暇部会の「60年のわが国余暇の長期展望」では、「余暇」を“自由裁量的なもの”と規定している。しかしみてきたように、ある場合には法的解釈ないしは法的規制の必要も考えなければならない。それはとくに、老人の場合についていえることだが、余暇を享受する「権利」が奪われているといえるからである。たとえば、既述した余暇歴の事例ないし余暇の阻害要因をみてもわかるように、個人的怠惰および個人的意思によって老齡期の余暇が貧しいのではなく、戦争、貧困、出産、育児、家事、仕事による多忙等の事情が介在して「余暇」はきわめて歴史的・社会的に規定されてきたのである。そうであるなら、自由時間の増大に伴って、楽しみを内在させた余暇の享受が社会的に保障されねばならないであろう。言葉をかえていうなら、余暇活動の阻害要因は社会的に排除される必要があるということの意味する。もし、「余暇」が、過去から現在に至るまで、金と暇と健康に恵まれたものの独占物と化するのであれば、このような「余暇」は社会的に批判され、克服されなければならない。そのためには、老人と余暇の問題は（老人に限らないが、とくに老人は社会的に疎外されやすい）、「余暇利用」を権利として位置づけ、その利用と享受を「権利」として保障する方向に発展させなければならない。この場合の「利用」という概念は、社会福祉領域で使われる“*delivery*”という用語より、むしろ“*access*”という意味内容で用いたい。なぜなら *delivery* という概念はサービスを供給する側の論理で組み立てられるのに対して、*access* 概念は、サービスを需要する側の論理で貫徹されるからである。ここでは、以上のように *delivery* と *access* によって示される“利用”の意味をあえて区別した。したがって、*access* としての「利用」には、既存の余暇施設、サービスの利用はもとより、たとえば余暇活動に必要な資源を生み出すための“余暇計画調査委員会”のような団体の設立・運営に対しても、余暇利用者が自主的・主体的に参加できるよう保障する内容が含まれる。換言するなら、政策としての「余暇対策」とは、以上のような内

容を含んだ余暇利用を、権利として保障する対策をたてることである。これは余暇に“接近”(access)する権利を保障することであり、そのために必要な諸資源(施設、余暇リーダー、その他の人的、物的諸サービス)を確保することにつながっていく。

以上、老人と余暇をつなぐ媒介として、「余暇利用権」の視点を記したが、この「利用権」を確保するにあたって、少なくとも次の原則を見落すわけにはいかない。すなわち、①余暇対策策定にあたって、老人の主体的“参加”を保障すること、②老人の身体的、社会的特性を考慮して“地域性”を重視すること、これは地域との“統合化”を目的とする、③老人の経済状況を考え、“公共性”を重視すること、④社会的に疎外されているのが現在の老人の状況であるため、何よりも“世代間交流”をはかること。これは「老人向」に特別な余暇対策をたて

るというより、むしろ、他の世代と共に余暇が保障されるような条件整備をすることを意味している。老人と余暇の関係を、上述のような観点から「余暇利用権」の保障と位置づけることは重要であろう。老齢期の余暇が過去の余暇経験の有無によって活発にも不活発にも結果したことは、単に自由時間の獲得のみならず、個人的には余暇に対する価値観ないし個人的 culture が影響することも無視できないが、他方、余暇利用のための環境整備の重要性があらためて確認される。この環境確保の問題は、個人のレベルで問題にするより、むしろ地域的、公共的問題として扱う場合に、余暇の現代的課題として位置づけることができる。老人と余暇の問題を、このような側面から接近することは今後に残された課題といえるのではなかろうか。

執筆 者 紹 介 (執筆順)

あお	い	かず	お	東京大学教授
青	井	和	夫	
いま	いずみ	よし	ひさ	一橋大学大学院
今	泉	佳	久	
ふじ	た	こ	いち	一橋大学社会学部助手
藤	田	伍	一	
いん	かみ	たけし	毅	法政大学社会学部講師
稲	上			
ふか	や	まさ	ひろ	日本経済研究センター研究員
深	谷	昌	弘	
はぎ	わら	きよ	こ	長野大学講師
萩	原	清	子	
なか	はし	たけし	武	北九州大学教授
高	橋			
すす	き	たけ	お	国立公衆衛生院次長
鈴	木	武	夫	